病弱支援学校におけるコロナ禍での支援の実践
－　オンライン授業を中心に　－

学籍番号　　219220
氏　　名　西澤　寿子
主指導教員　梅川　康治
副指導教員　野田　航

１．背景と目的

実習校である病弱支援学校分教室では、新型コロナウイルス感染症拡大を受けて対面授業が禁止となり、約１年半オンライン授業のみで児童生徒の教育を保障することになった。実習校では、それまではオンライン授業を実施しておらず、Wi-Fi環境の整備や、病棟との連携方法など環境を整えながらの実践となった。オンライン授業については、病弱教育を行う特別支援学校のほとんどがその効果を認識し、実施または検討している現状がある。

本実践課題研究の目的は、コロナ禍における支援のあり方について、オンライン授業を中心に実践をすすめながら、整理・検討することである。具体的には、病棟とのオンライン授業システムの構築、実践したオンライン授業、オンライン授業以外の支援方法の整理・検討、そして分教室でオンライン授業を実際に経験した教員のインタビューを通して、病弱支援学校における支援方法について検討をしていく。さらに、今後のオンライン授業を中心とした支援の在り方について考察を深めていきたい。

2．実践の内容と研究結果

2.1 オンライン授業のシステム作りと実践

オンライン授業のシステムは、分教室と病棟が連携・協力しながら築いたものであった。オンライン授業の実施当初は、つながらない、音が聞こえないなどのトラブル続きであった。しかし病棟スタッフと連絡を取り合い、システムの追加・改善を繰り返す中で、次第に毎日安定したオンライン授業が実施できるようになった。

オンライン授業では①１日40分２コマの授業時間を有効活用すること②共有機能などを活用し教材を分かりやすく提示すること③答えのフィードバックを素早く印象に残るようにすること④児童生徒との関係を構築していくこと⑤オンライン授業の見通しや安心感をもたせること⑥アセスメントを実施して学習の定着を確認しながらすすめることを特に配慮・工夫しながら進めた。

2.2 遠隔ロボットを活用しての実践

遠隔ロボットを活用して、児童２人が前籍校の卒業式に参加するのを支援した。病棟に教員が入れない中の実践となったので、オンライン授業の病棟スタッフとの連携体制が非常に有効であった。トラブルが起こる要因をできるだけ排除しつつ、保護者、前籍校、病棟の協力・同

意を得ながら丁寧に進めることができた。参加できた児童と保護者はとても喜んでおり、前籍校とつながる意義を再確認できた実践であった。

2.3 オンライン授業に参加が難しい児童生徒に対する支援

オンライン授業実施時は、授業参加を拒否、または渋る例が何件か見られた。児童生徒と直接会って対応できないこともあり、大きな課題となった。オンライン授業が難しい児童生徒の特徴として、①長期入院②低学年③人に気を遣う・繊細な性格などが考えられた。有効な支援が実施できない期間が続いたが、児童の意思や要望を保護者が聞き、それを病棟スタッフと学校が共有・配慮することで徐々に参加できたケースがあった。このケースでは前籍校との連絡会を複数回行うなど、復学支援も丁寧に実施することができた。

2.4 オンライン授業に関するインタビュー

コロナ禍に教育保障のために始まったオンライン授業について、メリットやデメリット、苦労した点や工夫した点を中心に、実際にオンライン授業を実践した教員６名を対象に半構造化インタビューを実施し、KJ 法に沿って整理・分析を行った。その結果、オンライン授業はコロナ禍の病弱支援学校の児童生徒の教育保障や感染予防においてメリットがあったことが示された。一方、オンライン授業はデメリットもあり、そのデメリットの多くを対面授業が補えることが示唆された。

３．総合考察

まず、感染予防対策が大きな課題となる病弱支援教育において、オンライン授業は教育保障の面で一定の成果はあったと思われる。対面授業が本格的に再開はしたが、今まで整えてきた病室にいながら授業に参加できるオンライン授業のシステムを維持・継続・改善していく必要性があると考えられる。そして、オンライン授業の位置づけを明確にし、対面授業とどう組み合わせていくのかを検討していく必要があると思われる。

次にコロナ禍といった緊急事態に対応するために、オンライン授業のシステム作りも含めて、児童生徒が実際に入院している病棟との連携が平時比べより重要であったことが、今回の研究で示された。連携が密にすることで、授業だけでなく前籍校と行事でつながる、メンタルに問題が出たケースの支援にもきめ細かく対応・支援していけると思われた。今後も児童生徒の入院中の教育保障や心理的安定に関して共通理解し、連携していくことが重要であると考えられる。

また前籍校や人とつながる重要性も示唆された。コロナ禍では面会が制限され、子ども同士の病室の行き来も制限された。その上、オンライン授業が一対一で実施されたため、入院しているほかの児童生徒との人間関係も希薄になるケースが多かった。そのため平時と比べ空間的にも心理的にも閉鎖的、抑圧的な状況に置かれていると考えられた。その中で、前籍校や人とつながれることは、児童生徒及び保護者の心理的安定につながり、復学の不安感をなくす上で重要であると考えられた。今回は、ロボットで前籍校の行事の参加を支援、前籍校との丁寧な復学支援を実践したが、今後は同じ分教室内の児童生徒同士をつないでいく取り組みも工夫・実践していく必要性があると思われた。